



お米の今を知る

私たちの食生活に欠かせないコメ。

いわき市では、海沿いの平坦な土地から、標高の高い山間地域まで、ほぼ全ての地域でコメが栽培されており、栽培面積、生産量、出荷額ともに最も多い農作物となっています。

しかし、コメの国民1人当たりの年間消費量は、1962年の118.3kgをピークに年々減少し、2022年では約半分の50.8kgまで減少しています。

消費量の減少に加え、担い手不足や高齢化による農家人口の減少や、耕作放棄地の増加など、大きな課題を抱えています。

時代と暮らしの変化によって、気付かないうちに、少しずつ進行してきた「コメ離れ」。

改めて、コメの重要性を考えてみませんか。

お米の力を知る

コメは、炭水化物をはじめ、タンパク質やビタミン類等の栄養素がふんだんに含まれており、生活習慣病の予防など、私たちの健康を支える大切な食べ物です。

また、食料自給率が低い日本において、食料安全保障の要であるとともに、農業生産の中核を担い、水源のかん養、自然環境の保全、歴史と文化の伝承など多面的な機能と役割を有しています。

「コメを食べる」ということは、私たちの食生活や健康を豊かにするだけでなく、地域や暮らしを支え、SDGs（持続可能な開発目標）へもつながっています。

そう考えると、お米を食べるといふ毎日の小さな行動が、大きな意味を持ってきます。「おいしい」が地域や社会にとって「いいこと」につながっていく、こうした力をお米は持っています。

食品ロス

大量の食品ロスが発生することにより、多額のごみ処理コストがかかるとともに、可燃ごみとして燃やすことで二酸化炭素排出量の増加や焼却灰のリサイクル処理など、環境負荷にも大きな影響を及ぼします。

私たち一人一人が、食べ物や生産者への感謝の気持ちを忘れずに「もったいない」を意識し、無駄なく大切に消費していくことが大事です。

食育

生涯にわたって心身ともに健康な生活を送るためにも、食育はとても重要です。

大人になってからも生涯にわたって実践し、育み続けていくもので、そうした食の知識や文化、食事作法などを次世代に伝えるという役割もあります。

核家族化やライフスタイルの多様化により、個食・孤食が増えていきます。家族や大切な方と食卓を囲み、コミュニケーションを取ることも食育の一つです。

お米と一緒に考えてほしいこと

水田にはじける笑顔

5月10日、雲一つない青空の下、田人小学校全児童による休田を利用した「田植え体験」が田人町貝泊地区で行われました。下條真輝さん（元田人地区地域おこし協力隊）や地域の方に教わりながら笑顔いっぱいでお米の手植えに挑戦。今回植えたお米は、ブランド米「希望の一粒」として、田人中学校と連携して育てていきます。



有機農業への挑戦

人にも、自然にも、生物にも、やさしい農業を。

有機農業とは、自然や生き物との「調和・循環」を大切に、科学的に合成された肥料や農薬を使用せず、遺伝子組み換え技術も利用せずに、環境への負荷をできるだけ減らしながら農作物を作る農業形態です。

食の安全や健康への関心が高まってきている中、「有機栽培」「オーガニック」といった言葉の認知も広がっていますが、その栽培過程は通常の栽培よりも多くの手間暇がかかります。

さらに、国が定めた基準を毎年クリアし、「有機JAS認証」を取得・継続した生産者だけが販売することができません。本特集では、山田町にて有機農業の発展・拡大に親子で取り組む「あじま農園」の挑戦を紹介します。

豊かな自然を回復させたい

有機農業の大きな特徴として、生物多様性の保全と環境負荷の低減が挙げられます。化学肥料や農薬は、土壌の有機質を減らし、性質を変えてしまうことがあります。



結果として、土に生息する虫や、その虫を食べる動物などに影響を与え、周辺の生態系を壊してしまう可能性があります。水や土などの環境を守りながら安全なコメを生産し、メダカやホタルなどが戻ってくるような、豊かな自然を回復させたいです。

食味へのこだわり

化学肥料や農薬に頼らず、コメ本来のおいしさを引き出すためには、春先の田起こしから、育苗、生育管理、草対策といった一つ一つのプロセスを工夫しています。特に、苗づくりに関しては、ポット苗を使用し、一株一株を大切に、強く育てています。

また、コメの食味には特にこだわっており、これまで「米・食味分析鑑定コンクール国際大会」で、特別優秀賞を2回受賞することができました。

仲間と共に

自分たちのコメの品質を高めて終わりではなく、有機農業の重要性を幅広く伝えるとともに、多くの農業者と協力し合い、地元根付いた有機農業を発展させていきたいと考えています。そのために有機農業仲間と環境保全型農業研究会「農L i m i t」を結成し、有機農業者の拡大や有機農法のさらなる追求などに取り組んでいます。また、新規就農希望者の育成も手掛けていきたいと思っています。

豊作よりも大切なこと

有機農業は手間がかかります。生産量も慣行栽培に比べると多くはありません。それでも、有機農業に挑戦し続けるのは、いわきの光、水、土の恵みを受けた安心安全なコメを消費者に届けたい、そしてそのコメをおいしく食べてもらいたい、この二つに尽きます。

消費者の皆さんに、オーガニックのコメや野菜を食べていただき、有機農業が持つさまざまな価値を知ってもらおう。そして、有機栽培の作物への選択が広がり、有機農業が拡大していく。その中で、土壌が健やかになり、豊かな自然環境や生態系が回復していく。この好循環をいわきの地で生み出していきたいです。

将来的には、市内の学校給食でオーガニック食品を提供する夢があります。アレルギーや好き嫌いがあられるお子さんでも安心して給食が食べられる、農業からこうした挑戦を今後も続けていきたいです。

農業は復興の原動力だ！ いわき市長 内田 広之

いわきの農産品のおいしさと栄養は、我々のプライド。それらをしっかり守り、次世代に引き継いでいかなければいけません。しかし、就農人口は減り続けています。

だからこそ、若い力や新しい技術も使い、盛り上げていかなければなりません。

すでにテレビや新聞で知った方もいるでしょうが、4月に、国は「福島国際研究教育機構（エフレイ）」を設立。国は、このエフレイを復興の総仕上げの研究所とし、国内外から数百名の研究者を浜通りに呼び込み、これから7年間で約1千億円の事業規模で、農林水産業をはじめ、ロボット、エネルギー、放射線科学などで、世界トップレベルの研究が展開されます。

そして、いわき市にも4月に「エフレイいわき出張所」（県内初！）を設立してもらいました。市役所職員も協力し、農業研究者と地元農家をつなぎ、スマート農業や有機農業、6次化などの研究を進めます。農業好きの若者は、着実に増えています。従来型の農業もしっかり守り、引き継ぎながら「就農者×若者」で、チャレンジも並行して進める。これしか方法はありません。

市役所も知恵をしばります。共に頑張りましょう！



あじま農園ホームページ→

さらなる挑戦へ